

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

諫早、2審も開門命令 矛盾問われる菅政権

【毎日・12月7日】(113号からの続き)佐賀県など有明海の漁民が諫早による漁業被害を訴える一方、菅農中の長崎県の入植者は開門による塩害を懸念。「菅さんの批判は菅農者がいなかっただけのもの」と、首相の変化に期待する菅農者もいる。

こうした地域事情を受け、党内の意見も割れている。開門を求める菅佐賀県連代表の原口一博前総務相は6日、菅首相に電話し「上告して漁民の生活や環境を悪化させてはならない」と高裁判断の受け入れを求めた。一方、長崎県連代表の山田正彦前農相は「干拓地での営農は2年になり、新たなかんがい用水の確保や防災工事も必要」と指摘。「国は上告することになると思う」と力説した。

佐賀地裁判決後、当時の自民党政権は控訴した上で、開門に関する環境影響評価(アセスメント)に着手。政府はこれを踏襲する形で、来春に予定されるアセスの中間報告以降に開門を判断する考えだ。だが、地元漁業者は環境アセスを「官僚の時間稼ぎ」と批判しており、菅政権が開門判断を先送りすれば「決断できない政権」のイメージがさらに強まることは否めない。

◇防災・高額対策費、国の主張退け

「生活の基盤に関わる権利が高度の侵害を受けている」。福岡高裁は漁業被害の深刻さを認め、国が開門が困難

な理由として挙げた防災、菅農上の主張をすべて退けた。開門命令は2審でも揺るがず、2500億円以上の巨費を投じた公共事業による漁業被害を、司法が立て続けに認定した事実は重い。

干拓事業の一連の訴訟では、事業の影響を究明する中、長期開門調査を国が実施せず、漁業者側は被害の立証で劣勢を余儀なくされた。このため有明海全体ではなく、干潟の消失や赤潮の多発化など、漁場環境の悪化がより明らかになった。被害認定が一部にとどまっても、開門による利益はすべての漁業者が享受できるとの理屈だ。

1、2審が認定したのはまさに佐賀県太良町、長崎県島原市の諫早湾周辺の被害だった。18年連続で貝のタイラギ漁が休漁に追い込まれるなど、更に堤防に近い諫早湾内の被害を訴えた長崎地裁訴訟の判決(来年3月)への追い風にもなる。

国は開門できない理由として、高潮などの防災、営農、対策費の高額さを列挙したが、控訴審判決は「防災上やむを得ない場合は閉じればよい」「過大な費用を要する事実は認められない」などとして、

いずれも退けた。

判決後、原告弁護団の馬奈木(まなぎ)昭雄団長は「当たり前前の結論を勝ち取るのに8年かかった。『もうこれ以上争うのはやめにしなさい』と、判決はきつくと言っている。国は直ちに開門に着手すべきだ」と力を込めた。

「子や孫に引き継げる」有明海の再生願う漁師

【中国・12月6日】

「これで以前のよくなにぎやかな海に戻る。子や孫に引き継げる」。原告のタイラギ漁師、平方宣清ひらかたのぶきよさん(58)は佐賀県太良町は判決を聞いた瞬間、涙があふれた。国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防の5年間常時開門を命じた6日の福岡高裁判決。長男(28)の「一緒に漁がしたい」という願いに、ようやく一歩近づいた。

タイラギは有明海の浅瀬に生息する高級品として知られる二枚貝だ。重さ約70キロの潜水服を着た漁師が、海底の泥の中を手探りで採る。1分間に100個採ることができれば一人前という。

19歳から父親に付いてタイラギ漁を始めた宣清さん。日焼けした精悍、せいかんな顔にこつこつとした大きな手が40年近い漁師生活を物語る。長男は10年前、「高校を卒業したら漁師になる」と宣清さんに打ち明けた。ところが、1997年に国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防が完成し、「ギ

ロチン」と呼ばれる堤防閉め切りで状況は一変。宣清さんの年収は5分の1に落ち込んだ。

「教えられるうちに技術を伝えた」。宣清さんは04年から3年間、長男を伴って瀬戸内海に出稼ぎし漁を手ほどきした。ただ、水深10〜20メートルと遠浅の有明海と異なり、瀬戸内海の漁場は水深50メートルにも達する。「潜水病で胸が苦しく気を失いそうだった。知り合いがサメに食われたことも」

その後も有明海の問題は回復せず、宣清さんが所属する有明海漁協大浦支所では、タイラギの出荷がゼロとなったのが6回を数える。長男は「家庭を持ったときに生活できるのか」と悩んだ末、現在は海を離れ、福岡市のイタリアンレストランで働いている。いずれは地元に戻って、漁をしながらとれたての魚介類を提供する食堂を開くのが目標だ。

一方、宣清さんから漁業関係者は2002年、堤防の開門などを求める訴訟を佐賀地裁に起こした。当初は周囲に理解されず漁師を辞めようと思ったこともあったが、賛同する漁業者は次第に増え、9月の有明海での海上デモには福岡、熊本、長崎からも漁船300隻以上が集まった。「何をやってダメかと思っただが、判決に勇気をもたらした。恵みを与えてくれる海をこのまま終わらせたくない。国に控訴しないよう求めていく」。有明海再生に向けた親子2代の闘いは続く。